

# ファシズムの体験学習の試み

## ——集団行動を通じた社会学教育の一事例——

甲南大学 田野大輔

### 1 目的

この報告の目的は、報告者が勤務校で担当している講義科目「社会意識論」のなかで実施した「ファシズムの体験学習」と題する特別授業の内容を紹介し、社会学教育の一環としての体験型授業の試みの意義と可能性を考えることである。

### 2 方法

講義科目「社会意識論」は受講生約 200 名、監獄実験やミルグラム実験などを通じて「普通の人間が残虐な行動に走るのはなぜか」を考えることをテーマとする社会学の講義科目である。そのなかで実施される「ファシズムの体験学習」は、ドイツ映画『ザ・ウェイヴ』のシナリオを下敷きにしており、2 回の授業でファシズムの成り立ちを全員で体験しながら学んでいくという内容である。

1 回目の授業ではまず、独裁的な政治形態をとるファシズムにとって指導者の存在が不可欠であることを説明し、教師がその指導者となることを疑似民主的に決定する。その後、教師＝指導者の指示のもと、席替えをして受講生を分断した後、共通の挨拶を導入し、教室内で挨拶と行進の練習を行って、集団の力を実感させる。さらにこの集団の目に見える標識として、制服とシンボルマークが重要であることを説明し、次回の授業で着用する制服（白シャツとジーンズ）を指示、シンボルマークを疑似民主的に決定する。

2 回目の授業では、共通の制服を着て授業に臨んだ受講生に対して、シンボルマーク付きの胸章・腕章を作成・着用させた後、集団の行動目標として大学構内の喫煙者の排除を掲げ、彼らを糾弾する練習を行う。その後、教室から構内のグラウンドに移動し、衆人環視のなか挨拶と行進を実施する。そして喫煙者（サクラ）が集まる場所に集合し、彼らを全員で糾弾して排除する。

### 3 結果

授業実施後に受講生に課したレポートから、彼らの多くがこの体験学習を通じて次の 3 点を驚きをもって認識したことが明らかになった。

①集団の力の実感。集団で一緒に行動すると、自分の存在が大きくなったように感じ、集団に所属することへの誇りやメンバーとの連帯感、非メンバーに対する優越感を抱くようになること。制服やシンボルマークといった単純な仕掛けによって、そうした意識が強まること。

②責任感の麻痺。指導者から指示されたから、あるいは他のメンバーもみんなやっているからという理由で、普段ならけっしてやらないようなことでもやってしまうこと。個人としての判断を停止して、指示されるまま集団にあわせて無責任に行動してしまうこと。

③規範の変化。最初は恥ずかしかったり、こんなことをやるのはおかしいと思っていたのに、集団にどけ込むことで恥ずかしさを感じなくなり、ちゃんとやっていないメンバーに苛立ったりするなど、集団で一緒に行動することを義務のように感じはじめること。

### 4 考察

以上から、「ファシズムの体験学習」には一定の教育的効果があることが明らかになったが、授業そのものはまだ試行錯誤の段階にあり、実施にあたっての倫理上の問題のほか、技術的な改善の余地についても検討する必要がある。この体験型授業の試みの意義を考察し、社会学教育の一環としての可能性を追究するため、フロアからの忌憚のないご批判とご教示を乞う次第である。